幼稚園が取り組む2歳児保育

藤本明弘
（幼稚園園長）

嵯峨幼稚園は京都の観光地、嵯峨・嵐山にある、大正14年に創立された私立幼稚園です。早いもので私がこの園に入って約30年になります。その間、幼稚園が担い、果たすべき社会的な役割も大きく変化してきたことを、いまさらながら実感しています。

例えば今から30年ほど前は、預かり保育はまだまだマイナーで、園児獲得の側面が非常に強い印象があったことを記憶しています。このように回想すると、今では女性の社会進出の増加に伴い、平日どころか夏休みなどの長期休業期間中の預かり保育も当たり前の時代になっていて、まさに隔世の感があります。

そしてこの間、預かり保育と並んで、地域に対する園庭開放という取り組みが、本園の「子育ての支援」の二つ目の取り組みになりました。未就園の親子が、園庭開放の当日に遊びにやって来るというスタイルです。当時の園庭開放は、親子が安心して遊べるハード面（場所）を提供するという色合いが濃いものでした。

そのような公園代わりの園庭開放から、子育ての相談に乗ってくれたり、アドバイスをしてくれたりするソフト面（子育ての専門家

藤本明弘（ふじもと あきひろ）
嵯峨幼稚園（京都市）園長。

の存在）が必要だと感じるようになってきました。「近くの公園に遊びに行きたいのだけれども、うちの子どもがよその子どもとけんかになってしまったときにどうしたらいいのかわからないから、怖くて行けない」という声を耳にしたのがきっかけです。

そしてさらに、不特定多数に向けた園庭開放だけでなく、親同士のつながりをつくる目的で、担当者を固定した登録制の親子クラスも毎月行うようになってきました。当初は月に2回程度でしたが、今では週1回のペースで行っています。そしてさらに5年ほど前から、2歳児が子どもだけで通う週5日クラスと2日クラスも誕生しました。

このように本園にとって子育ての支援は、本来の幼稚園としての取り組みと同じくらい重要な役割になっていると感じています。本園がこのように子育ての支援に本腰で取り組むようになった最大の理由は、今の日本社会の中で、一人で毎日24時間幼い子どもと向き合っているお母さんたちが、本当にとてもしんどい毎日を過ごしていることを実感するようになったからです。わが子が3歳になってようやく幼稚園に入園する頃には育児に疲れ切っている母親に出会うようになったからです。

そして母親だけではなく、子どものほうも明らかに未成熟なまま入園してくるケースも増えてきました。まじめで一生懸命な母親ほど、1・2歳児特有のイヤイヤ期の子育てに疲れ切っている光景を目の当たりにして、なんとか幼稚園に入る前に手を差し伸べることができないだろうか、という思いが本園の子育ての支援の原点です。

ここ数年の間に「子育て支援」という言葉は社会に浸透しつつあり、社会全体が子育て

に関心をもつこと自体はとても歓迎すべき素晴らしいことです。しかし、現在国が進めている「子育て支援」は、本当の意味で子どもの立場や、わが子との時間を大切にしたい保護者の気持ちに寄り添っているとは思えません。むしろ就労を重視した「子育ての肩代わり支援」にあまりにも偏っていると感じています。

もちろん女性が働くことを反対するつもりは毛頭ありませんし、保育を必要とする家庭への支援はさらに充実すべきであると考えています。しかしながら、子どもや保護者の思いに寄り添った本当の意味での「子育ての支援」が今後ますます幼稚園の大切な社会的な役割であるという認識に立っています。

このような思いからスタートした本園の2歳児保育でしたが、次のようなことを大切にしたいと考えています。

(1) 子育てのすべてを肩代わりするのではなく、私立幼稚園が行う2歳児保育の在り方を考えて、その意味を保護者にも発信する。

毎月、参観ではなく親も一緒に保育に参加したり、子育てについて話しあったり、お昼ご飯を一緒に作ったりする機会などを設けながら、子育てに「手間をかける」ことの意義が実感できるように心がけています。

大人同士がつながりあうことで、楽しさだけでなく、しんどいことや悩みも一緒に共有できてとてもうれしいという声が聞けたり、そのことが子どもの安心感にもつながったりしていることを感じます。

(2) 3歳児保育を少し薄めたような、安易な保育は絶対に行わない。

みんなで一緒も楽しいですが、その前に一人ひとりの「やりたい」「いやだ」「こっちがいい」という、一見わがままで否定的に捉えられがちな姿こそ2歳児の本来の自然な姿で

あることを保護者と共有することが大切であると考えています。

(3) 2歳児保育を行う以上、質の高い保育環境（モノ・ヒト・コト）を実施する。

2歳児だからこそ、できるだけ質の高いモノ（おもちゃ・床材・家具・照明・園庭など）や出来事や保育者に出会うことが大切であると感じています。

(4) 0歳児からの発達・特性を専門的に学ぶ。

園内研修を通して、乳児期からの育ちを学ぶ意義が職員全員で再確認でき、0歳から5歳までの育ちの道筋を共有することが、幼稚園全体の質の向上にも役立つと感じています。

(5) 本園だけでなく京都府全体の幼稚園が、0歳児からの育ちをきちんと学べるような研修体制を整備して、京都全体の幼稚園が乳幼児保育に対する理解を深める。

京都でも2歳児保育に取り組む幼稚園が増えつつあります。本園だけが学ぶのでなく、組織としての研修体制を整備して京都府の幼稚園全体が乳幼児の育ちを学ぶことで、さらに学びが深まります。

また、各園の取り組みを共有することで、課題や幼稚園ならではの良さも見えてきます。お互いが保育を開くことが全体の保育の質の向上につながると考えています。

まだまだ実践できていないことのほうがたくさんあり、午睡や年少組への接続など課題も山積の状況ではありますが、保育園や認定こども園ではなく、幼稚園が行う2歳児保育をこれからも大切にして、保護者の皆さんと共に歩んでいきたいと考えています。